平成 28 年度

地球環境「自然学」講座

第　17　回

テーマ

ローカルサミットの展開と「森里川海プロジェクト」

講師

ローカルサミット事務総長

（一社）場所文化フォーラム 名誉理事

吉澤　保幸　先生

平成 29 年　1月 14 日（土）

認定NPO法人・シニア自然大学校

吉澤保幸

（プロフィール）

1955 年新潟県上越市生れ。1978 年東大法卒、その後日本銀行での 20 年の勤務を経て、
2001 年 2 月～ぴあ（株）役員、現在取締役。（一社）場所文化フォーラム名誉理事。
ローカルサミット事務総長。「にっぽんの…」大店長。
（一社）低炭素社会促進協会代表理事。NPO 法人ものづくり生命文明機構常任幹事。
南砺市政策参与他。

場所文化フォーラム等を中心に、地域での「温かなローカルマネーフロー」の具体化を図りつつ、「ローカルサミット」の毎年開催を通じ、全国の地域活性化活動の連携によるローカルからの日本再生に注力。また、環境省が提唱する低炭素・循環・共生の統合的アプローチや「森里川海」プロジェクト等の推進を通じる「環境・生命文明社会の創造」に向けた活動を積極的に展開中。

著書：「グローバル化の終わり、ローカルからのはじまり」（2012 年、経済界）

地球環境「自然学」講座講演要旨

2017 年 1 月 14 日

(一社)場所文化フォーラム名誉理事
吉澤　保幸

私は、今年 62 歳となります。昭和 30 年に新潟の雪深い田舎町に生まれ、豊かな自然の中で育ち、そして東京へ大学進学で上京。政治学を学び、卒業後 20 年間日銀マンとしてマクロ金融の第一線で働き、そして 1998 年の山一特融等金融危機の後始末に奔走したところで、日銀を巡る事件の責任をとる形で退職し、早めの第二の人生を歩み始めました。その後、縁あって上場企業経営に関わりながら、一方で、各地で地域活性化に関わる中小企業の仲間達等と一緒に、地域から日本の再生をめざし、いわゆる強欲的な冷たいグローバルマネーとは一線を画した、いのちを繋ぐ道具としての温かなローカルマネーフローの創出を図る活動に関わってきました。なぜなのか。最初は、日本の金融の形を変えたいという思いでありましたが、今は、もっと深い思い、つまり、未来の子ども達にきちんといのちを繋いで行かなくてはならないという使命に変わってきている様に思います。

5 年前、娘に孫娘が生まれた時、世代をつなぐことの意味を実感しました。この子が、20 歳を過ぎ、子どもを生んだとき、まだ自分は生きているかもしれない。と言うことは、自分にとって、祖父母から考えると自分世代を入れて、人生で 5～6 世代に関わることになる。言い換えると、100 年に及ぶ時間軸できちんといのちをつなぐ責任を担っているのだということを明確に自覚したのです。

かつては、60 歳になれば家業を継ぎ、自らは隠居したでしょうし、老舗企業の方からは、「自分が社長になった最初に考えたことは、後継者を誰にするかである」と聞きましたが、自分のように都会に出てきてサラリーマン人生をおくる者には、こうした世代をつなぐという意識ともはや無縁になってしまっていた訳です。

この間、全国各地でお話しして、良く出てくる質問は、「50 年後、100 年後の世界なんて分らないし、それに責任を持つなんて出来ないのではないか？」と言うものです。それに対し、孫娘の話や「今年生まれた子どもが働き盛り、子育て盛りになるのは 2050 年頃、そして天寿を全うするのが 2100 年で、絵空事の世界ではありません。その時、将来世代にどのような暮らし方をして欲しいか、その基盤を作る責任が我々にはあるのではないでしょうか？」と答えています。

翻って、今、我々は、文明の転換期にいるのではないでしょうか。

19 世紀の産業革命以来の西欧近代文明観に基づく人間中心の「もの・拡大」の経済成長の追求によって、お金で全てを計る巨大システムがグローバルに形成され、都市も田舎も大きなグローバルマネーの依存関係に絡めとられ、組み込まれてきました。わが国は、戦後 70 年間、その道をひたすら走り続け、いわば世界の最先端に立ちました。しかし、2008 年のリーマンショック、そして 2011 年の東日本大震災と原発事故によって、その見直しを大きく迫られています。そうした中で、人々の閉塞感は、これ以上ものが増えても心の豊かさや満足度は得られないという、いわゆる「幸福のパラドックス」と呼ばれる状況に逢着する一方で、将来を見通すと、格差拡大、人口減少、少子高齢化、地球温暖化問題等諸の根本的な諸課題に直面し、人類にとっても未知の世界をどう打開出来るのか、不安材料だけが見えてくる、と

いうことに起因しているからでしょう。それは、この間日本を牽引してきた団塊世代の大人達や多くの政治家達にも見られる状況といえましょう。

では、こうした事態を打開し、未来をどのように切り開くべきなのでしょうか？
我々が取り組んでいる地域活性化の大きな視座は、今一度ローカルから、都市と地域の関係、人と自然、人と人等の関係を紡ぎ直すこと、そして、この間グローバリゼーションを牽引してきたお金の論理を見直すことに集約されます。
そして、そうしたことを幅広く議論し、新たな文明観と社会構想を描きだすために全国の仲間達に呼びかけ、2008 年の洞爺湖サミット開催直後から毎年ローカルサミットを開催しています。その開催趣旨は、「人類・命・地球が直面する危機はグローバル資本主義に起因するところがあり、国民国家間の調整・協議のみでは解決できないことを皆で確認し、これまでの延長線上ではなく、忘れかけている地域の仕組み等に解決の糸口を見つけ、各地域に埋もれている場所文化を甦らせ、自然と共に命輝く環境・生命文明の構築を目指して」というものであり、毎年熱い議論を交わし、ローカルサミット宣言を発しています。と同時に様々なキーワードを共有してきました。「確かな未来は懐かしい過去にある！」（第２回）、「人と人、人と自然、過去・現在・未来との確かな関係を取り戻す『いのちの紡ぎ直し』を行う」（第４回）、「生きとし生けるものとの暮らしを取り戻すために、森里海のつながりを取り戻す国民運動を展開していかなくては、未来を創る子供達にいのちをきちんとバトンタッチできない！」（第７回）等でありました。

改めて、この間の高度成長を推進する一方で現在の課題を生んだポイントは、2 つあるといえます。
ひとつは、都市への地域からの様々な富の移転と還流のメカニズムです。国富を増やすべく、地域の豊かの象徴であったで自然環境（森・里・川・海）を経済の論理で分断し、その恵みを効率性で最大限収奪し、その豊かな自然の中で営々と紡がれていた人と人とのつながりを引き裂き、地域を支える人材を都市に集め、都市に集った国富（＝お金）を地域に還流し、道路をはじめ公共施設等のインフラの近代化を図ってきました。その過程で、かつて地域の中で、心の豊かさを支えてきた、経済、暮らし、自然が包摂し、一体化した社会（自給と共助の上に稼ぎの世界があった）が、経済（＝稼ぎ）が全てを覆いつくす形になってしまい、地域のフローが都市へ依存すると共に、地域の豊かさを支えた各種ストック（自然資本、社会関係資本、人的資本）が大きく毀損されてしまいました。
今一つは、経済と政治の考え方にあります。戦後追求してきた「もの・成長」の経済は、自然資本が無限であることを前提とし、国富を富ませていき、その富を効率的・平等に国民に分配することが政治（まつりごと）でありました。しかし、その大前提の自然資本の無限性は、もはや世界規模でも確保されなくなったことは、明らかです。このまま行くと地球規模での環境破壊と温暖化等が進行し、90 億人に達する人類が生き延びられなくなってしまいます。昨年 12 月の COP21 でのパリ協定では、全世界で低炭素・脱炭素の世界への転換を世界が公約化したのです。

ローカルサミットでは、こうした現状認識を共有し、右肩上がりの経済の成長を希求するのではなく、自然環境制約の中での心豊かな成熟社会を構築していくための社会デッサンを語りあってきました。具体的には、グローバル一辺倒の目線では

なく、この間忘れてきた確かな暮らしを紡いできたローカルを起点に、地域資源の自立循環（「エコビレッジ構想」と呼んでいます）を最大限図ると共に、森里川海の繋がり（「森里川海」プロジェクト）から「豊かな自然資本」を再構築・取戻し、その過程で「人と人の確かな関係（＝社会関係資本）」を再構築し、子供達も含めて地域の誇りを担う「地域人材」を育成し、地域ストックを時間をかけて再生し、その恵み（フロー）を子孫に残し、「確かな未来」を各地域で描き出し、その地域の連携で日本再生を目指すと言うことです。と同時に、その過程で、日本人がかつてから持っていた、「生きとし生けるものと共に暮らす自然観」と「100 年後に何を残すべきかを考える時間観」を回復し、更に、「お金に換算されないことに価値を置き、お金をいのちをつなぐ道具として自らの手に取り戻す貨幣観」への転換が重要となります。そして、ローカルな志民が、そうした価値観の転換と併せて、主体的に、地域が抱えている課題に自ら応える形で意思決定でき、小さな雇用を様々に生みながら、地域内でお金を巡らせるための官民協働の枠組み（地方創生ファンド等）を作り上げることによって、従来の中央集権的な政治ではなく、地域の自立自尊が確保される新たなまつりごとを形成していかなくてはならないのではないでしょうか。

地域資源の「自立循環」と「自然資本」の再生については、上述の 2014 年第 7 回ローカルサミット IN 高野山の宣言を受ける形で、2014 年末に環境省においてスタートした「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトとの連携が重要です。その提言案には、「森里川海が連なる流域圏を俯瞰し、上流域と下流域、農山漁村と都市がしっかりとつながり、多様な世代や組織がそれを支え合う。森里川海の循環体系が健全に機能する中で、環境・経済・社会の課題が統合的に解決し、低炭素・資源循環・自然共生社会が同時に実現するような、そんな地域づくり、国づくりを目指すことは、日本の力を高め、国際的にも誇り得るものと考えます。日本人の英知を結集して、自然を豊かに再生し、森里川海とそのつながりの恵みを引き出す社会へと転換する歯車を回していきませんか。それは今を生きる私たちから将来世代への最善の贈り物になるでしょう。」とあり、特に、子ども達の野生復帰や自然との触れ合いの拡大が重要課題とされています。

一方、新たなまつりごとの具体的な取り組みとして、東近江市等で動き始めた「地域創生ファンド」の創出が極めて重要となりましょうが、そうした地域内でのお金の循環の仕組みについては、現在の金融情勢とも合致していると言えます。

すなわち、この間、お金の儲け・成長のシグナルと呼べる金利が、徐々にゼロに向かい、ついにマイナス金利となりました。これは、決して、従来の成長路線に戻すためのインフレ期待引き上げのカンフル剤といった一時的なものではなく、今後の日本の成熟社会においては、この間のお金がお金を生むマネタリーリターン追求の信用創造という従来の金融モデルがもはや作動しにくく、むしろ、これまでお金が巡りにくかった、農林漁業・環境・再エネ・介護・福祉・教育といったいのちに直接関わる分野への投融資によって、マネタリーリターンよりむしろソーシャルリターン（小さな雇用、地域での安全・安心な暮らし確保等）を希求していく金融モデル・社会的投資に、地域の志民と地域金融機関等が力点を移していくべきというメッセージと読み解くべきでしょう。

また、それは、企業活動面から言えば、この間のエコノミックリターン（経済的利潤）のみの追求から、徐々にCSR（社会的責任）重視へ移行し、更に近年ではCSV（クリエイテング・シャエアドバリュー＜社会的価値の共有＞）への転換が叫ばれていますが、特に三方良し的（買手良し，売手良し、世間良し）に活動してきた地域企業が、地域資源の再生と連携しての新たな家業・商売を創り上げていくことこそが、最先端であることを意味しています。その意味で、地域の企業がチェンジメーカーの立ち位置にあると言う自覚を持つことが極めて重要にもなってきます。

以上のような歴史・社会情勢認識を踏まえつつ、昨年11月に第9回ローカルサミットIN倉敷・おかやまを開催しました（メインテーマは、「志つながりの流域思考～過去から未来への接点、今をどう変えるか～」でした）。

ローカルサミットでは、これまで会を経るごとに、我々大人たちが今の世直しを語り合うだけでなく、過去の先入観や経験にとらわれずに、現実を素直に直視している中高生も含めた若者達が自分達の未来をどう創ろうと考えているのかについて、一緒に語り合い始めて来ましたが、ついに、今回は、若者会議という独立した分科会を開催し、中高大学生達40名近くが、現在と未来を熱く語り合い、我々大人達に向けて提言を発表しました。「自分達も地域のことを本気で考えている。だから、もっと真正面に向き合って語り合う場を作って欲しい」ときらきら輝く目で、熱く語る女子高生達の凛とした姿に、我々大人たちはドキドキ戦慄しつつ、「主役は彼らであり、彼らに未来を託することが出来る」と確信しました。

その確信の背後には、今回のローカルサミットを支えてくれた（一社）高梁川流域学校が、そうした子ども達と一緒に、既に、高梁川流域を巡る自然・歴史等を学び、触れ合い、祭りや地域行事を協働で行ったり、長老達にかつての知恵を聴き取りしたり、未来へつなぐ取り組み（地元学やビジネスモデルコンテスト）を具体化するなど、幼児から、小中高大学生、そして父兄・老人達へと、各世代への上手なバトンタッチの仕方を先駆的に模索している実例に、直接触れることが出来たからでもありました。

そして、そこに集った大人たちが未来の子ども達へ発したメッセージは、倉敷ローカルサミット宣言において次のように紡がれました。

「（前略）倉敷に集った我々、全国の志民は、この倉敷に蓄積された歴史・文化・自然豊かな場の中で、現代の様々な課題、一流の地域づくりとは何か、持続可能なローカル社会での新たな暮らし方とは何か等について熱く話し合い、世代を超えて多様な志といのちをつなぐことの重要性を確認した。共に生活者であることを再確認し、大人、子ども、文化・教育・経済・行政・宗教・医療・福祉・地域関係者等、多種多様の地域を愛する人たちが、深く連携し、様々な共同作業を通じて、出会いの場をつくり、お互いの顔を合わせ、本音を語り合う機会をつくることが重要であり、そこに集った人達が、次世代の若者達にこれまでの過ちを正し、真の地域の宝物を受け継いでいくことこそ、確かな持続可能な未来を創ることが出来る。（中略）今回は多くの生徒、学生が参加し、将来に向けたビジョンを考えた。大人と子どもが本音で語り合い、未来を創り出す責任は今にあるという認識のもと、未来に生きる将来世代の意見に真摯に耳を傾け、将来世代が描く未来に一歩でも近づけるよう、大人達が今を変えることに勇気を持って行動することをここに宣言する。」と。

以上